

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

JAPAN

Tamia



送
2507
23-22

繪本拾遺信長記後篇卷之九

因縁

長秀夷路る木林車

羽羽長秀機とて勢援

踏るの森車よ筋増

踏る森合戦之車

小田勢踏るの森よ押ある

踏る乃森合戦於木條よ勇力



躋る森寄手解因歎えを幸

小田方不吉の兆

上人御見舞の御膳乞

小田勢強勁

孫六頭りゆ

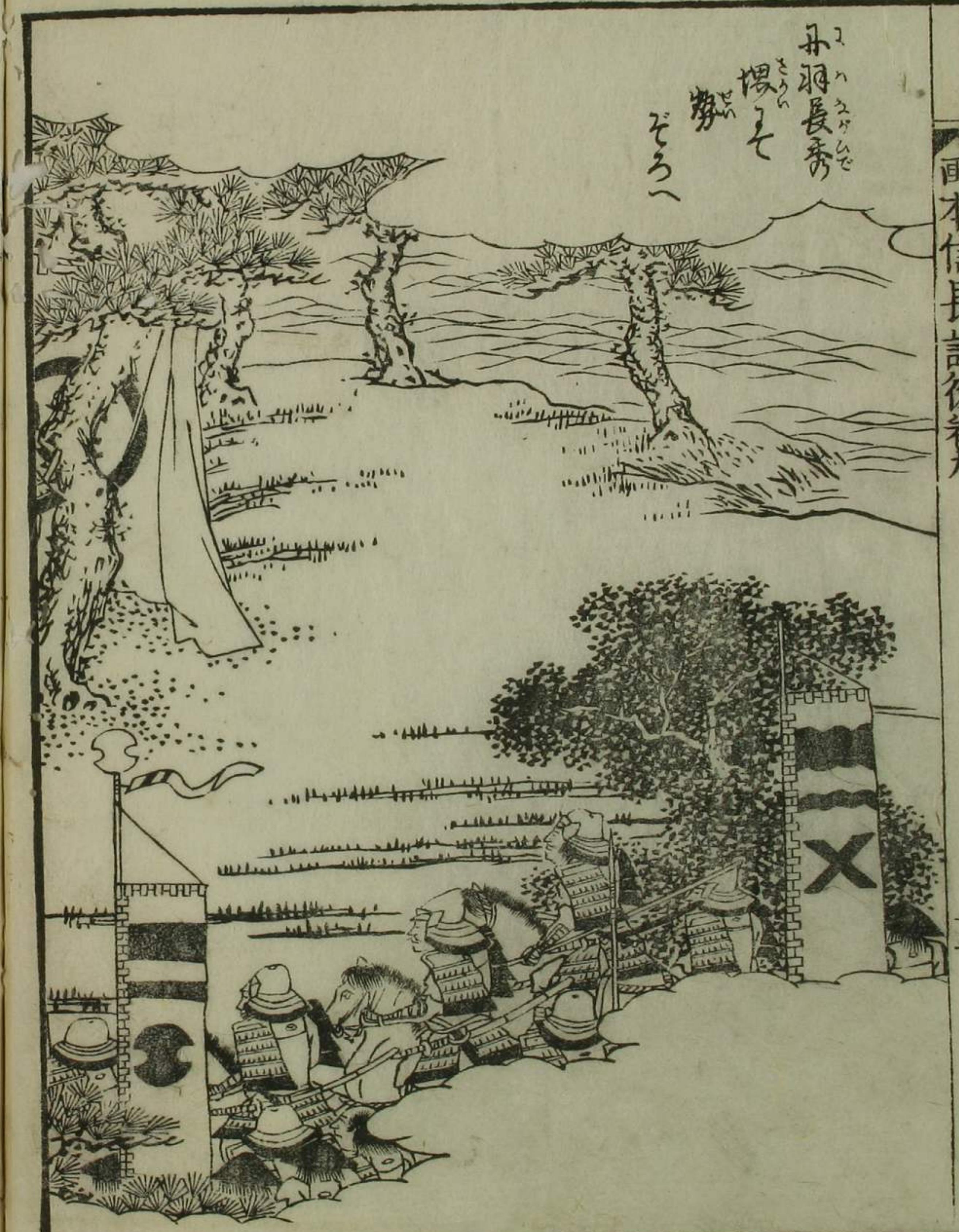
光秀が優劣奉承まよ列々

上人遠氣え幸

繪本信長記後編卷之九

長秀え躋る森幸

去りて小畠義よ高津せしに國渡海の軍ね小羽又郎左衛門
尉長秀は天正十年六月朝日城又野持をほし軍と押出ひの
候へされば近郷近至の門後を不審のゆき思ひに國渡海
の軍兵を此不つて勢揃ひかひゆる若や躋るの森へ押すを上人と
討きしんこの謀とはあざやとあやしみされば追へを殺すへ
けあらば進にしよしに於如上人家老を紙集め被り明智
がや誠る猛矣勝とみうや何よりと先其用ゑくへ居
きのゆ出來せんとく幸よ難矣の繪本源市志摩とに即ちと
もどりし近村の門後を以てせらう此市もとせふ驚き絵本



志摩の三河に及びて安修門後戻りと馳走す
百余人在奉教寺と雲々と望むが六月一日お詫又即在萬
長秀三余人在をみて紀伊國より押上を躊躇の森より十丁斗
小の方又押上をみて威風とも云し其勢を二手よまうら一
ひたぬ井羽又即在萬門溝は仰者守ち山守契守戸田氏
元守坂井又在萬門を一々又百人又一ひた長秀が腹心の良
等は三郎左衛門坡は左原村上周防守尾爰喜兵房等一
又百人を右より内附又夷謗人と其用を分はせば本教寺よ
り家老下向の一族とてどう坊主衆とは万の美宗寺河内
の専光寺橋州小瀬の毫毛接寺日岡三番の室守坊を専も武
士とは難能の経本一統源市多大を慶と即宗門の渡院に

付なりと老々若々のきりひよく近在近村の門後百姓等秋
りくと馳集り一命とうげうち防ぎをんじて宴や而當
の御船は今口又移りぬとば信長を眼と上人を悼み歎き悲
まびとよりぬと上人を今かそれまでとねばしてよしと申茎
所看君其外の舟一族り名舟生害みびと乃舟先悟と門後
の士卒と下向し殊ふぞありれよもいたましりをく次第に備り
舟羽が軍勢三余人在潮の下く押上り舟堂のめぐりを十重
サキよゑかと問をどくとうげうしり今やか教寺粉のこ
くあらんと兼て差悟の門後の道俗皆一日よ夢をもる
内と一度よ後つゝい叫喚地獄のありさまをかくやともうか
ぬし下向教寺をとげほ懸したるや寺よ祖跡聖人



の活潑を思ひて命うぢて法歎を防ぎ叶ひぬ際には死せ
よ其歎こそ日未忘じまつて西方院院佛光明を殺してひうた
まし利鉢を捨て此佛歎小田信長を極樂淨土より薦めんと
何のす細うあくべきぞやいもやもとて知り難なり門
後詮本の一徳すこそ吟へ猪のうる木本の危陣はど
とねはをめぐらら後炮を以てくと押さく人得りのよきが行居
うちくと押すを終炮をあうけ矢を放ら督射は素戔スミハシ
とのまづ門内より此不破らとくばちや上人の御生害
あくべ防げやうせげとおこよほづ門と並べ立る後炮の脣
まを振へんとよか出せと月よりすれ歎の大弊後の門後方

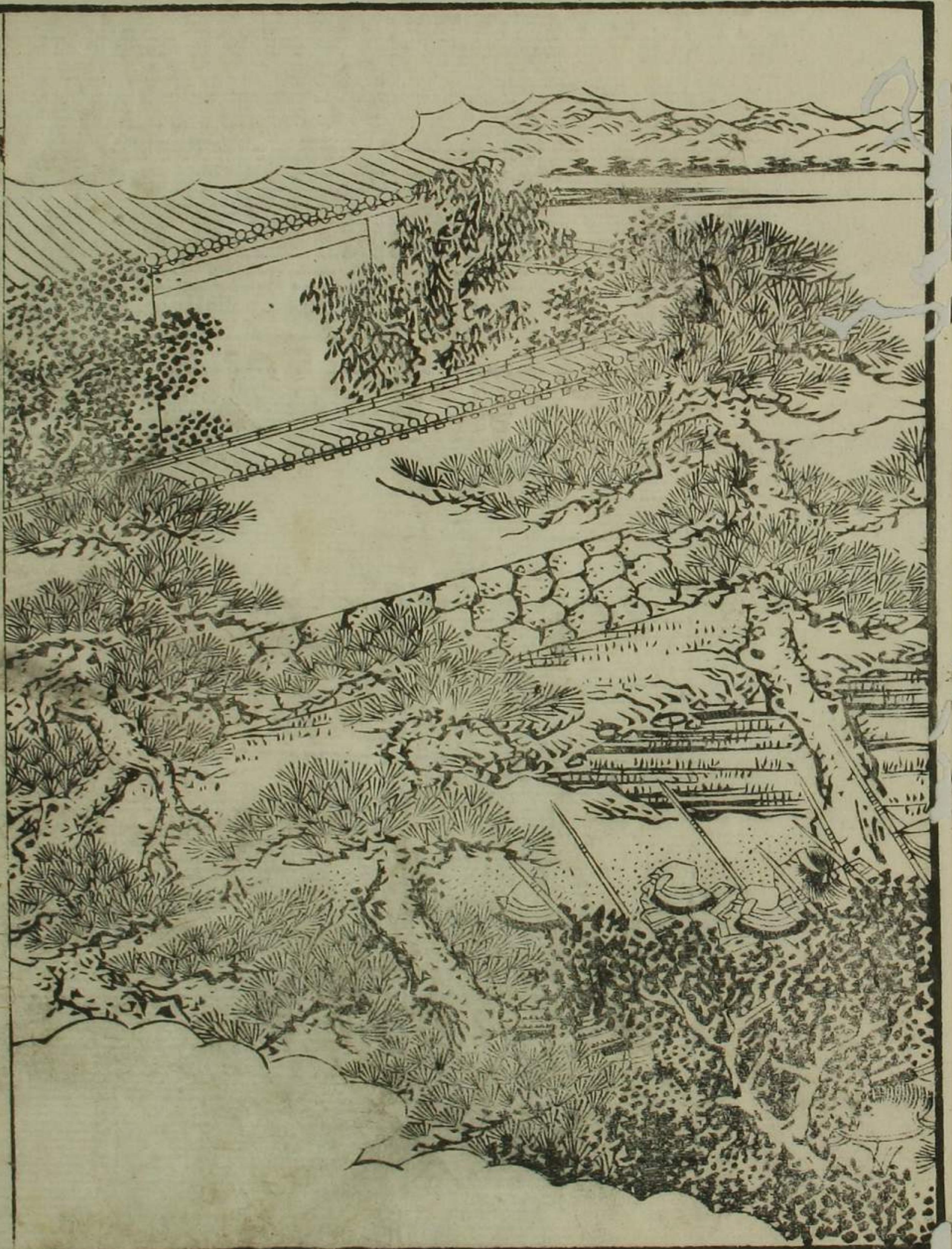
はく防ぎ難ハラカニをくへう

警の森合戦の事

寺内の軍兵ふせたみてよしらが詮本豫市月を人に豫六斬
てからじと落とよ撃引じて熱門を推ひき輪廻のぐく
えまきうる歎の中と門と鳴ひく室ての摩利支天の荒る
ゑさまよ赤後左右新玄室至今日とかくの死くひと血の浪
をあげて歎ひ一冷一かし勇勢をう寄すの軍兵を歎
と海の石山はむずう要害湯はしこ寺内よ百枚の門後がく
集うたまはとく何うをう仕あんべき只一りよ美崩さんと
思ひの外詮本一徳う猛勇信心堅固の働き死と恐よかう峰先よ
かえよかひ死人頗多く思ひに軍隊実死した所ぞう引

小田勢
源の森

えぞ
おも



すうち後陣の勢をこれを又先を小勢又突崩され
すやあらじきうちもひよ引き者どもかられとら
せども引うち軍勢の辭らればいよ／＼強をみてこへうち
ぞ給本隊へ得うし／＼あまほ／＼とちがまゆにしき
あらん率切を羅うを近内と號ひうちも寄るの中も
誰ももじあらん鉄砲隊六右の脚よ／＼尾房と
と倒さば歎兵これを討んとぞ／＼とえ考不を隊六行
足立とあらうまに近付歎と防ぎられと既よ危く又見
うちわうち給本隊市うち小かくと見えられば宙と飛んで
延素うちくくうち歎兵との方へと追敵／＼終え隊六を
船の上一舟とけて退きうち寄るの軍兵これと見え追討

せよとくもうちうち大船母長秀これを制く日も西山う
ひうけが夜軍せんも給なきうち明朝一日よ押立一息よ
素めんと軍勢をまどり下陣へ引うち本船寺よりし
門後のうちくく今自討死の討死と兼て差贈てあり
されと歎退しよりとべきやうなく今宵り婆婆み遍當と
あうと一ツふにあすり明日こそ心よく討死／＼みての所す
そくに遠ひうち船樂津去る故く臣名あひこよひ限り
とあらう令く守て居うち小被せもするにあらの陣と見す
うち小信者が軍勢をかげしとくと炬火備やの火ア天
よつみきつろくの旗は物狂はよ吹うべき事の方も
歎兵をもぬ限りうちせびにしも云ひ方ほし門後をもと

諸侯乃森
合戰
於本源六
勇力



見てゆきけり。此の軍兵や、ゆきり此軍勢をみて、一日よ暮れ
うはす付も、うそだまへと、うそめはいと、や軍のほじまくぬ
き小暮期の急佛をもとすと、寺中一日よ稱名の聲るく唱とば
歌如上人も御連枝家老をもん惠く、也集ららと、御陣の美
聲をか、堂の正面より居を移し、御宿せたあく、せ活つて、來世
渴死の財筋是懲はと、はつとも祖限聖人なまく、は宗
門を弘通はして、より教百年の今より、祀と蒙き、
後信忠堅固と、矢がれども、そぞうに、今此妙雄より宗門忽
失滅するがゆき、本丟をも、葬し、清らん毛金く、我不
徳のつむれ、不そと志新、又向くも、といきと、と落し、
一庵の人こそ、を見きりある悪ひ信長や、うおあきまき、
誠を此際すく若し、やあくとも、の勿体なやと面慶のく
後、ほしむや、ふく上人宣ひ、明日ハとくより、歎軍奏
考に、也強て、詮ぎ戦ふるに、犯期の餘んで、罷帳りて、何う
せん考え、門内又近づくが爲め、我とりもともと、生害と、さるが
堂よ出をうけ焼、と、内蔵し、かよし、門後も皆、内蔵と、これあ
まばらすに、ひと内蔵よ、せん得、空し、内蔵、うべき樹木のつる
の御脇乞難、を頂戴せよと、西へ御流しが、さうが胸せま
つて、こらへ得じ、一日よまつて、渡るに、間のをすと、ほじ、あくと
主をうくる次第なり。

跡の森寄、御園松まえ事



明治は六月三日まことにあけもろいさう小笠の太軍
門をよせ其勢ひに恰も大山をほんぎた滄海と深くあり
さまでにあ小岡をどんとあげる今やか殺寺の団兵一擧
又美崩さんじうをすう門後のらんくとりや今こそ我へ
従生の附する此程よ死せんすりハ一働き戦ふくそれと云々^{モナガ}
討死せよと叫びて得物引上げ斤噭と呼んでおへすり丹羽が
軍兵何の念ねえと因縁に被急々衆入りやと越後長柄を
引げて隙間へひらくとつけよとすにをやねの處
て岡を掘り土を一ひきあひの陣によせりしく其雲中
南安妙法蓮華經の七事公書する信長が大旗ひらひらと
カヌゲす候ふよまれて丹羽が馬の筋にあたるあは

これを見ゆ歎む味方りきし反覆ゆ不思議やいづれ
脇見の仕業もやと互方とも勇氣たゆ賞財の財と敵
たり此れ如上人の御次男阿茶丸君川津勝元と付ひせば
御連数一百に御生る事あせらまんと既に念佛り絶せぬ
内後ひうやくやゑゆ終ふといふしてくらん寄るの軍勢
卒よゆをまたうじ後陣より退くあつさまうまは
上人をもじらぬとせ内後の虎中らゆ心得にの歎の結構る
これやとまく美にしむ勝の合戦ようくして引ひく
こそよしれ先の味方の人々をせびき出さんと御もとと
否にあつまつて立たずやと忽ちも熱軍を崩して旗を落さ
戦を崩して右側より左側ようじき移のとく見て上方を

上人
御^ノ乞^{ハシ}
御^ノ請^{ハシ}



て彼をどうぞ厚恩讐ともいひやううすまやく爲せし人々
何處より強劫しとあややとえよ論じてあらざるもの
ありとて近郷の門後り男女こけ川越びりを奉りきの
二月朝法款信長京都本能寺より旅宿せしが間で明智光秀の守先
秀保殿を祀し不善にゆきよを信長を討ゑついて二条の櫻を
廻る息男城之久信忠を夷殺し海中海外脱よ太丸よ及びには
今考みの陣中へ此のゆふかとてこそ無くよめて引をは
と若くさうかの小上人をもぐれ御連枝お老門後のんくそれの櫻
美きものあくびるやと追討して討扁て血氣の若者邊足四
て追くまほろくの門後の百姓をばほくへふんく竹槍棒
猿威り猶然と身をおく乃歎風そぐくよ寧まことば信長

が裏配と見立を乞を失ひ繩を消へる小田の諸軍勢誰一人ぬ
一あきせと戰つんとつゝ者ちく云民多が竹槍にてをあひて或
討うる者もあり七烈に碑と八戒と羅例され徳をもてて逃
れを長秀と號しと舞人と制とれど耳より又よ安入生て跡
跡でさうかの長秀と治方かくととよ松とく這く櫻の木へ
引立多ひ見若しとすらあうとまぢう去やと小半殺すの序堂
みは思ひ没けども其の退散ともと殊わは信長明智とるよ
知りとしと穿へてやと小説よ勝利の源本よのひ優量と華の元
嘆心地して玄法款の根の御へてすがふ門によせひとてよ別室み
ぞうじだき偏よ孫陀の利総の先秀がとく偏く佛歎と深誠
ゆし終ひ者方うぞやあうほしやあがくやとまづての表とさる

小田勢
發動



て熱び勇ひむくい間のをすうやびにし終本縁へりきの人の金錢
は流丸の行足をすぬと歩引うるしが信長討をすむのえ
軍扇もよみて到處とまつより、わきのうじと癡みの若駒も
かゑと禮着みづく本堂へ行足あゆみよ延赤りと人の用事
出で日の丸を画ぐ軍扇をもとと用きあつめて、やう法歎
のそひみて宗門のよ／＼末慶がうの沖繩島と推して御ひ
つ足をすゞり參らふ伊達政家老門後の男女よいやくと
墨の数りて、くさりたけたりすれど今よ躰の森御堂よ
ゆく、躰踏頭と陽紙の具足をそしらんとの美術にて躍り
此右例よもとくや實に明智が謀叛今する遅うせば上人御
足より聞す害ひゆせと祖師聖人の御苦難と一財の煙と焼

おひて宗門勧修にゆぶきたよ其種をあやまじ医下のふ
ス命とあしるし孫院銷世の悲劇よもと不うとば誰うと
仰がざらん何人うこれをるがざらんほく信長の御あり
さまを考る小勇猛膽異を今よ獨歩、吾の家にますて僅
々數年の間、日本守圓を切ちこぐ王トの武能と称せよと三
後の右大店よ昇進しに海の擅柄を掌手よ極ア後アテテ
曾みの優傑うれども幸よ就く航賈多く後の姫よ取石の
あるましゆくに靈場を燒傍公殿、本願寺とせまつて佛龕
の上人を害し宗門を創滅せーと計をもつてゆき此節
天下變態の靈山ある聖山をも美崩さんと軍馬としむけ法佛
諸天の姫よもと明智先秀うれし翁達よ命とあし候へまじ

孫六
躊躇



さうすき信長の自業自徳積悪の報不重つてかまうべき
因果の爲にあり且今朝駆けの森よその陣よゑ雲想ひ
南岳妙法蓮華經の旗をもたらす所へり先よ義姫の会
戦は腰を出く信長の御旗兵集ひづくともう參りし
を今長秀が陣中へ廻して信長の愛配を送り諸佛諸天
の靈も終のまゝば寂靜寂麿も信長の要達を傍り
る壽限のみうちと身の毛りよざらて思へ、

上人遠參之書

六月十四日 明智の守光秀に贈るの森の御堂へ僧都と送り
て中宮を了す。信長要延口、よる端長。お詫言も御山と東
妻元さんと其夫婦に贈る。ともに御ひざのまゝにび鄰つて

我を教さんと先秀は小田をめに疋田をもとへども実の
を後よりは信長が斯波家の陰で我に済和の流すて
去後の後孫足利家の家へ方々秋天下と再貞さんと跡
そ云方義昭云を信長よどもともよ計て足利を祀さん
と近去り小信長云方を廢し自ら天下の政事と独立し
我浮舟渠が奸計よ隙り一度り順ととゞぐる今
足利家へ忠誠と薦し信長を討て西園よゆしまに義昭
云を京都よ向再び云方と仰ぎまことに希に上人猪
圓の門下へかづしきを以て門徒の輩をして先秀がわざ
改りてめおち云方への忠義何うも先よ勝らんとも
今度か秋寺の危きより宗門断絶せんとどもゆく實よ



卷のことは史より載れ基へしを光秀が信長を討はる
て今か教寺の安宅へるより泰山の山に上人此不以感にう
がともや小御堂あつて又畿内及び近に陣勢多の門下
兵もや効くにし強ひ光秀よ力を添へ小田の猪突と云
いよ／＼法缺の根を剥落つんこそ万全の計こそけふ臣
能中國毛利畠にへ隠義服云を上洛しらす毛利
家再真の助からしが秀ひて遠宵ひみづくじよしく深衣
きく我そヒ光秀よ力を公せ終くあらばが半教寺と名の
ぞく加賀城を築登体勢近にを寄附へ松州石山よか寺
再建せりまほ／＼宗門繩昌に計むし何が助勢の名偏
よれをねとと言ひ方わてや遂にうち小上人安し石さき

御詔を何よりも言ひ拂へ度宗門破滅へ上人御又より
既に御は害ひてきのぶに光秀が力より佛歎信長と云へ
齒寺安穏ちるゝを得ておひまに光秀ひ齒寺よ旋て宗門
再兵の大權誠とやびきうしが此度の計よゆかしてひ鉄券もそ
もうべきうこやうる上人院をうへせ強ひ光秀が信長と討
ひ齒寺の急難を絶んとあはうじ已が眼とまうさんとて主君
と仰／＼信長を弑へわと奉はして齒寺よ思へうけぐるや
柔もぐを理よあくじたと光秀齒寺のみ小信長と歎
國くより小田家簫代の臣下廻登て光秀を元にうちうる
にし我傍の身として遂に二味門徒よやかし悪と助けしと

云々と家主の服禮ある程の不孝此上のあらべきや此慣例より改ま
ドとく即光秀が使者へ着物よりや誠ろと申くをより此度我
をえよひ門後一統の御教しよより助命しては余濱足見よ
うじに依て諸國の門後へ下向の兵不迷惑もしくされども教事の
防戦又門後を遠參の輩がようじりて一應殺人をして実情と
相証而して後脚や筋よ落ひりゆうや後ひる腰くわ豫防に
えじと返送して使者どうもせ強ひうる上人の脅氣凡人の囚
がゐぬよじと後よぞ人々感じる

繪本捨送信長記後篇卷之九終

